氏　　名	岸下　卓史
学 位 の 種 類	博士（社会学）
報 告 番 号	甲第３９２号
学位授与年月日	２０１５年3月３１日
学位授与の要件	学位規則(昭和２８年４月１日文部省令第９号) 第４条第１項該当
学 位 論 文 題 目	「先住民性」の多文脈化をめぐるミルパアルタ村落の民族誌 ――「伝統」と社会的帰属のローカリズム
審 査 委 員	（主査）阿部　珠理 奥村　隆 生井　英考 松村　圭一郎 受田　宏之（東京大学大学院総合文化研究科准教授）

Ⅰ．論文の内容の要旨

本論文は、歴史的にメキシコ先住民が近代国民国家の成員から排除されてきた状況を前提に据え、都市化しながらも先住民文化を保持するメキシコ市ミルパアルタ行政区を事例に、移住によって民族的出自が多様化している住民の先住民アイデンティティが、ローカルな歴史、伝統実践、所得、住居、祝祭の各文脈で、民族的誇りや負い目として表現されている実態を考察し、先住民性を媒介としながら、文脈によって可変的に表出される民族的・社会的帰属意識を動態的に描き出したエスノグラフィーである。

1 章では、国民の理想型、メスティーソ(メキシコ先住民とスペイン人植民者の混血者)に対置される形で、真正な先住民が本質化されてきた事実を確認した上で、B・バタージャの「深層のメキシコ」概念に依拠して、先住民性が本質化を免れうる可能性を指摘している。まず、メキシコの国民国家化の過程で、「理想の国民」としての「メスティーソ」が要請され、その国民カテゴリーから除外された人々は、「真正な先住民」というカテゴリーで括られた点が確認される。さらに、B・バタージャの提示した遍在する先住民性、すなわち「深層のメキシコ」に依拠しながら、社会関係の中で「先住民性」が変化するものであることを論証している。先住民性の遍在状況にあって、今日真正な先住民性から社会的に離れていく別様の先住民性の存在を仮説的に提示し、それを本論の中核的な問いとしている。

2 章では、別様の先住民性の議論を発展させて、メキシコ市の原村落と呼ばれる場所で、先住民文化との繋がりで自己同定を行う住民たちが現れている点が取り上げられ、これを真正な先住民とは異なる先住民であると位置づけている。「原村落」は、都市空間において衰退したと考えられていた先住民的な文化を保持する集団・場所を指している。原村落の社会的出現は、サパティスタ運動、政府による公式認定、土地保全運動、先住民文化の残存に影響を受けながら、住民たちのローカル文化への愛着によって生じていると考察する。原村落に関する先行研究が、その現代的意義を充分に焦点化していない点を指摘すると同時に、原村落の今日的重要性が、都市的文脈のなかで住民が先住民性に回帰していることだと論じて、1 章の問いを深めている。

3 章では、原村落のひとつであるミルパアルタの歴史が創作されている点に着目し、創作の動機を近代化に対抗するための「伝統」の再構築と位置づけ、この伝統が今日のミルパアルタへ及ぼす影響を、選挙言説の分析をつうじて確認している。まず、ミルパアルタで、住民が歴史との関わりのなかで原村落への帰属意識をどのように醸成してきたのかが考察され、その過程で住民が、F・ビジャヌエバという郷土史家の創作した根拠薄弱な歴史を受け容れてきたことを明らかにしている。その歴史は、ミルパアルタを舞台にした先スペイン期から現代までの多様な民族の興亡と王権をダイナミックに描

写するものだった。住民によって受容されたその創作史が、歴史学的には虚偽でも、内容の普及や慣習実践を通して、今日では社会的現実の一部を構成するに至っていることが提示されている。創作者である郷土史家の遺志と住民の意志の符合が、創作史と選挙パンフレットの言説内容に反映されており、そこに見られる伝統回帰のメッセージを、A・ギデンズの真正な伝統に依拠して論じている。

4 章において、貧困を脱したミルパアルタの住民、ミルパルテンセが希求する先住民性は、産業発展の結果としての富裕化、生活環境、教育水準の向上といった「近代化」を前提としている点、負い目を抱えた「真正な」先住民性とは異なる点が明らかにされている。近代化によってメキシコの都市圏で見られるような生活環境と当該地域のそれがますます近似しているにもかかわらず、ミルパアルタが依然としてノパル(食用サボテン)生産に代表されるような先住民文化を維持する産業構造、および生態環境を維持している点に着目し、ローカルな文化や慣習が、主流社会への統合の過程で消滅していくのではなく、住民自身の意志で「伝統」という位置を付与され、むしろ創出されているという特徴的な点が明らかにされている。

前章ではミルパルテンセの先住民性が育まれる文脈が言及されたのに対して、5 章では、ミルパルテンセと移住者のあいだの所得・住環境の格差と再生産が論じられている。また、婚姻による階層移動と階層再生産が同時に生じていることも明らかにしている。ここではまず、先住民系移住者が貧困状態にある実態が報告される。所得格差を明らかにするため、ビジャ・ミルパアルタで実施した聞き取り調査に依拠し、豊かなミルパルテンセ、一般の移住者、先住民系移住者の所得格差が、彼らの先住民性の濃淡に相応していることを明らかにしている。次に、住環境においても明らかに所得格差が反映されていることが確認される。また階層内結婚が固定化している一方、階層間結婚が半数に上る予想を覆す実態が示されている。中流のミルパルテンセ世帯の婚姻状況を確認した結果、予想に反して、他の地域出身者との婚姻の事実が明らかになり、移住者対象の調査もまた、ミルパルテンセと結婚した者の割合が半数に上ることが明らかになっている。この事実は同時に、ミルパルテンセと結婚しない移住者が依然低い階層に留まることを意味することが提示されている。

6 章では、祝祭という文化実践に着目し、先住民性を表現する場として、ミルパアルタの地域祭と私的なフィエスタが取り上げられている。前者をミルパアルタのローカルな「伝統」実践を表現するもの、後者をミルパルテンセと移住者の社会階層を如実に表すものと位置づけている。ミルパアルタの地域祭において、行政区首長による「伝統を取り戻す」という演説が、F・ビジャヌエバによる創作史の言説に従っている実態が観察されている。そして、本質的にあるのではなく住民自身の手によって創出されるべき「伝統」のコンセプトが、社会的立場の異なるミルパルテンセによって共有されている

ことも確認される。地域祭でローカルな先住民性が演出される一方、各世帯で私的に催されるフィエスタは、その規模と出し物をつうじて階層性の表出の場となっている。これら 2 種類の祝祭から、ミルパアルタの先住民性と個々の住民の社会的属性が観察されている。

7 章において、インタビューデータに依拠して、ミルパルテンセが貧しい生活を送る移住者を「インディオ」イメージで同定し、彼ら自身と弁別することで、真正な先住民性を回避していることが浮き彫りにされている。まず、インタビューで、ミルパルテンセが自らを先住民と決して認めない実態が確認されるが、同一のインフォーマントが申請者とのラポールの深まりと共に、先住民と認める態度の変化が提示されている。また、貧しい先住民系移住者がミルパルテンセに劣等感を抱き、ミルパアルタで疎外感を感じているが、中流世帯の先住民系移住者の場合、この屈折した感情を抱いていない点が確認されている。つまり、相対的に高い階層の先住民系移住者が、ミルパルテンセに対する負い目を打ち消し、彼ら自身の先住民性を自由に表出する実態も観察されている。このように先住民性の表出と回避が、状況と関係性のなかで選択されていることが明らかになっている。

終章では、1 章から 7 章の内容を振り返った上で、ミルパアルタという地域には、創出的な先住民性が「伝統」的慣習をつうじて育まれていると共に、社会階層に応じて真性な先住民性がラベリングされる実態があるが、それは「民族的」なものではなく、「社会関係的」なものとしてとらえ直されている。さらに、経済発展を遂げながら先住民性を保持するミルパアルタを、都市部やアメリカ合衆国へのメキシコ先住民の移民現象と対比させ、先住民性の負い目と尊厳の間で揺れつつも、先住民アイデンティティを理想のものに変えていく実践的ローカリズムの場として評価し、論文全体を結んでいる。

Ⅱ．論文審査の結果の要旨

本論文は、２０１３年１２月１２日の研究科委員会で予備審査委員会の開催が承認され、２０１４年1月１５日および7月２日、２回の予備審査会を経た後、２０１４年７月９日の研究科委員会において、予備審査委員会が指示した諸点を修正・改善することを条件に申請することを認められ、修正された論文をもって、２０１４年9月２４日に申請されたものである。

本論文についての審査会は２回にわたり開かれ、１０月２８日の審査会において、本論文の問題設定、中心的論点である「先住民性の多文脈化」、「創出的・遂行的先住民性」、それらを明確化するための各章の有機的関連性、統合性といった諸点に関する質疑が行われ、諸点の過不足の改善要求がなされた。その結果１２月１７日に開催された審査会において、本論文に飛躍的な改善が認められたため、一定の水準に達したと認定し、文言の微調整を条件として公聴会を開催することにした。２０１５年1月１９日の公聴会では、申請者の報告、質疑への応答ともに博士論文の水準を十分満たしているものと評価され、その後の最終審査を経て、審査委員会は全員一致で本論文を合格とするという結論に達した。

本論文は以下の点で高い評価が与えられた。第一に、メキシコにおいては国民統合政策の積年の課題としての民族問題、就中メスティーソと先住民のアイデンティティをめぐる議論と研究は、近年の先住民運動の高まりから活発化しているものの、「先住民性」の表出の多義性、多文脈性を論ずるものは未だ少ない。日本においても、黒田悦子（１９９６）、落合一泰（１９９８）、禅野美帆（２０１１）といった極めて少数のラテン・アメリカ研究者によるメキシコの先住民アイデンティティ研究があるのみである。先住民研究の特殊性は、部族社会の多様性のため、一見極めて地域限定的なミクロな研究に見えながら、実は近代国民国家の成立と国民統合というマクロな研究と切り結んでおり、双方向の交点に位置するものであることから派生する。この点研究者に求められる政治・社会学的スコープの広さと、人々の帰属意識をめぐる文化人類学的な質的調査の綿密さの両方を兼ね備えることは容易ではない。メキシコにおいては、多様な出自の先住民と混血（メスティーソ）という境界可動性の高いグループ間の包摂・排除関係が、さらに民族的・社会的帰属意識を複雑にしている中、この問題に果敢に挑戦した申請者の意欲と、本研究成果の分野への貢献は高い評価に値する。

第二に、ミルパアルタとその住民を構成するミルパルテンセへの着目である。ミルパアルタ行政区は大都市メキシコシティのただ中にありながら、農村的風景を温存するという地理的特徴を有し、ノパル（食用サボテン）生産は、ミルパアルタの基幹産業として地元を潤すとともに、第２次産業、３次産業の経済発展の契機となった。この「都市

的農村」の主流階層であるミルパルテンセの属性と民族的帰属意識のあり様をフィールドワークによって析出したことは、申請者の研究の大きな独自性である。ミルパルテンセは、数世代前にミルパアルタに移住した古参の住民で、もともとナワ系先住民を出自としながら、ミルパアルタの近代化と自身の経済的成功によって、先住民ともメスティーソとも同定しないミルパルテンセ・アイデンティティを醸成し、独自の生活空間を創造していることを申請者は明らかにする。加えて、近代化・脱先住民化（ある意味でのメスティーソ化）の達成により、貧困と劣等のスティグマが付着した「真正な先住民性」と距離をおきつつ、別種のあらたな「先住民性」を創出しようとするミルパルテンセの営為を、歴史的にはフィデンシオ・ビジャヌエバによって「作られたミルパアルタ史」を起点におき、それを受容し、「伝統」や「慣習」の中で「先住民性」を表出・実践する彼らの現在から、実証的に描き出した本研究の意義は、極めて大きい。

第三に、ミルパアルタの住民カテゴリーそれぞれの経済状況、住居環境、婚姻関係をあぶり出した上で、ミルパルテンセ、中流の先住民系移住者、資源をもたない新参の先住民系移住者が、どのような状況下で「先住民性」を表出/回避するかを焦点化したことによって得られた成果は大きい。地域祭やフェイスタの祝祭空間また日常生活の様々な場において、３者の同一グループ内でのコミュニケーション、および他グループに対する局面で、先住民であることの負い目や自信といった感情を基盤にした先住民としての「振る舞い」が、選択的に表現されるという申請者の分析は、とりもなおさず本論の主題である先住民性の「多文脈化」の証明であり、ここに本研究の他にみられない独自性がある。状況依存的で可変的な意識のありようやそのゆらぎは、多極・多次元のマトリクスの中で複雑さを増すが、申請者は概ねその整理、描出に成功しているといえる。このプロセスを通して、先住民アイデンティティは従来理解されてきたように必ずしも「民族的」なものではなく、「社会関係的」に創出されるものであるという総括は、申請者の現時点における高い到達点を示すものである。

このように本論文は大きな成果を生んでいるとはいえ、いくつかの疑問と今後の課題も残されている。まず、多文脈に現れる選択的先住民アイデンティティの根拠となっているフィールドデータが、必ずしも十分とはいえない。今後はインタビュー調査におけるフォーカスの絞り方、リサーチデザインの最適化に改善が必要であるし、体系的なアンケートの実施や一次資料の収集等によってデータ面での充実をはかることも考慮すべきだろう。またデータの取り扱いに関して、個人情報に関する調査倫理の徹底も望まれる。

今後メキシコの都市先住民人口の比率はますます高まり、古くからの居住者と新参移住者の間の経済的、文化的な資源をめぐる葛藤の深まり、さらに先住民内の分化と利害対立も深まるものと予想される。本研究が、ミルパアルタのローカリズムに根ざしなが

ら、自身言及しているように他の都市部やアメリカ合衆国へのメキシコ先住民の移民現象も含め、グローバルな文脈への接合と敷衍化を可能にする理論モデルを提示してゆくことが今後期待される。

予備審査、本審査それぞれの修正過程において、審査委員からの要求に応じて、論旨の補強、主題収斂にむけての章の再構成、フィールドデータの再分析を経て、論文の統合性、一貫性の深化が見られた。予備審査の段階と比較すれば、瞠目すべき飛躍的向上が見られたことは、審査委員がたかく評価するところである。公聴会での報告と質疑への応答も遺漏なく本論文の成果を述べたものであったことを付け加え、審査委員会はここに、本論文が博士（社会学）の学位論文として相応しい水準であることを、一致して認めるものである。